は白河帝の承暦年間の創立であつて山水の勝形を選んで營まれた淨界であり、或は「榮花物語」に或は「法勝寺供養記」等に其の平安期の優麗を物語つてゐるものの創建以後の興廢を詳述されてゐる。又た安樂壽院も洛南の一勝區たるを文獻と相待つて現影せしめてゐる。斯かる史蹟調査は從來のものと其の趣きを異にししかも文獻と遺物とを兩立せしめて其の當時を髣髴せしむることは最も適切なる史的研究と云ふべきものである。本府調査委員諸氏の各自專攻を融合せる處に本冊の面目が窺はれる。

（四六倍判本文一六〇頁、圖版五五）【以上島田】

彙報

◎京都帝國大學文學部史學科研究旅行

三浦西田兩教授指導の下に伊勢地方に研究旅行を行ふ爲め一行十四名、去る六月六日の朝細雨降りしきる中に京都驛をたつたが近江路に入ると輝かしい日光が車窓を訪れて無類の好日和となつた。山田に下車した時は正午を少し過ぎて居たが態々出迎へられた森田神宮皇學館教授の東道で先づ徽古館を見學する前に事務所の一室で加藤館長から特に蒔田文書を見せられた。柴野栗山、藤井貞幹等の知名の學者の書牘が其主なるものであつた。本館の方では文書として既に著聞されてゐる角屋文書光明寺殘篇等の外に開國主義者といはるゝ井伊直弼が嘉永七年十一月に納めた攘夷祈願文の存在は一種の皮肉であつた。繪畫には伊勢新名所歌合等武器には稻富一夢所持鐵砲等があり其他古銅印及印笥、壺鐙日本丸船首等が目を引く。土器の中では革袋を模したものが二つその一つは

縫目の跡を失ひ流水紋がついて居た。筑前出土の小坩付鐙は高臺の彫刻も爽て難い。時間の都合上内宮の參拜を明日に讓つて是日はゆつくり神宮文庫を見學することゝした。抑當文庫は奈良朝時代の皇太神宮文殿に淵源して居るのであるが直接の起源は林崎及豐宮崎の兩文庫に在ることゝ言ふ迄もない前者は約六百年前荒木田經延によつて創められた内宮祠官の學問所であり後者は慶安元年渡會延佳等の首唱によつて外宮祠官の修學機關として設けられたものである。明治となつて是等の兩者が合併され神宮の圖書をも加へて新に規模を整へたものが卽ち今の神宮文庫である現在の藏書は九萬千百九十一冊に及ぶといふ。一行の爲めに特に出陳された珍籍の中では皇太神宮禰宜譜圖帳は紙背が延喜四年正月十五日の日附を有する玉篇の古寫本である事によつて有名である。渡會神道の大成者で北畠親房ともなみなみならぬ關係のあつた家行神主の類聚神祇本源も亦注意すべく親房の著と稱せられる元々集の内容との關係に興味が湧く尤も此處に現存するのは其原本ではなく正平の頃實相神主の書寫せるもので寫本としては最古のものに屬する。その外には荒木田氏註引付、荒木田氏興引付安東郡權專當沙汰文、天養記、内宮假殿遷宮記、元々集神道集、神宮典略、新釋令義解、令外官職志、律義解。逸令義解、古事記裏書注文妙貞問答本居宣長自筆太神宮儀式解序、林崎のふみくらの記、大鹽平八郎自署献本の洗心洞劄記杯が取り〴〵に感興を惹いた是等に就いて坂本神部署長、千田文庫主管から懇切な説明を與へられたことは深謝に堪えぬ、これで此日の豫定を終つたから薄暮二見館に投じた。七日の朝一行は夙に起きて夫婦岩の邊まで散策して見た。沖合は濛氣稍深く碇舶中の第一艦隊の雄姿を模糊の裡に包んで居る。七時に二見を立つて内宮に詣る。加藤禰宜の懇切なる案内で一行は恭しく參拜を遂げ道すがら各殿舍について説明を聽いた。林崎文庫の址を尋ねて山田に向ひ外宮の參拜には篠田禰宜の案内を煩した斯くて神都の地を後にしたのは十一時であつたが間もなく松坂に着いて本居宣長翁の遺蹟を今は公園となれる舊城跡に訪ふた。是日は日曜日であつたが飯南郡役所からは特に係員を向

けられて鈴屋保存會事務所の倉庫にある翁の畫像古事記傳以下の自筆の稿本、翁遺愛の大小各種の鈴、醫師としての翁の使用された藥箱等を示されたのは同じく一行の見學に便宜を與へられた當地の素封家小津清左衞門氏の好意と共に深く謝するところである元城下の魚町に在つた翁の舊宅は今はこの事務所の隣に移されてある、それは種々の意味に於て一行を一種の感慨に引き入れずには置かない一存在であるが、殊に元の物置を改造されたといふ階上四疊半の窮屈で熱苦しい翁の書齋に佇んでは覺えず頭の下るのを禁じ得なかつた一行は更に翁を祀れる縣社山室山神社に詣でゝ、ここに又翁の人格業績に對する思慕の情を新にした斯くて日盛りの町を徒歩して翁の魚町の宅址を訪ひ松坂の驛へと辿り着いた、二日の研究旅行に到る處豫期以上の好果を收めて旅程の豫定全部を終了した一行が京都に歸つて驛前に解散したのは午後八時を過ぎて間も無い頃であつた。【山根】

●肥前國有喜貝塚發堀

去る七月中旬、京都帝國大學考古學教室の濱田博士は同教室島田貞彦、地理學教室小牧實繁、同史學科學生小川茂樹諸氏を帶同して肥前國北高來郡有喜村の貝塚を發堀し、石器、骨角器、土器類等の外、三體の人骨を採集された。由來同地方は先史時代遺跡に稀薄の處であるが今次の發堀に於て、二個の原始的石槨と人骨胸腔部に一個の鐵鏃發見の新例を見ることが出來て該時代の究明に最も興味ある資料を提供した。而かも所謂石槨の一個には男女二體の人骨を認め、男子は其の痕跡に過ぎないが女子はやゝ完存し、石槨外の貝層中の他の人骨との比較研究は清野謙次博士の手で調査されて居り、近き將來に其の精細な研究が考古學的調査のものと相待つて報告さるゝであらうが今ま發堀當時の層位的關係に於て石槨の貝層中に半沒さるゝ狀態は少くとも貝層築成直後のものであり、又た此の石槨には蓋石なく、底部には小礫石を敷ける點など、それが原始的のものであることを示現し、これが次で生ずべき所謂「阿波式石棺」の先驅をなし續いて古墳等の石棺に脈絡を認めらるゝ可能性を有してゐることに於て興味ある例證と云はねばならぬ。又た貝

層中の人骨胸腔部に發見した鐵鏃は約二寸の菱形を呈するものであつて往々古墳等より發見するそれと類似してゐる。此の人骨は貝層中に全沒され其の層位に攪亂の跡なく、又た人骨の取り上げに際し、右部肋骨を採集した後に發見したことは埋葬當時のものであることに疑ひないものである。されば此の種、鐵鏃が脚腔部にあつた事實の解釋如何は人種上に取つて重大な資料を與へるものであるが該時代に鐵器の存在する事實を打消すことは出來ない。又た當遺跡を構成する土器は繩紋土器系に屬しやゝ原手の沈紋ある肥後阿高のものに類する。此種の土器か繩紋系統中やゝ末期に屬するものであることは既に濱田博士等の唱導する處であつたが今次の發掘の結果、如上の特殊な發見によつて兎に角にも本遺跡は所謂石金兩時代の過渡期を連鎖するの實例として斯界に提供されたものと云へよう。〔島田〕

◉史學研究會

例會 去る六月廿七日午後一時半より文學部第十教室にて開催、左の講演あり、來會者約五十名、五時閉會す

成吉思汗の挽歌に就て

文學士　鷲淵一君

挽歌は蒙古の風習として存して居るものであるらしいが今日迄の記錄に於ては成吉思汗の挽歌より外に見當らぬ、此點からしても成吉思汗の挽歌は珍らしいもので研究の價値は大きいと思ふ。此挽歌の記されて居るのは蒙古源流の外にない。その蒙古源流は漢譯本とその原本なる奉天本（蒙文のみ）及之と同一本と思はるるものに Achmait が譯註を施したものと、最近に手に入つた喀喇沁王府藏の異本源流の四つである、此四種の間に少しづつ異同があるが、今此等を比較して右の挽歌を譯する事にしたのであるといつて、蒙古歌謠の一般的性質及成吉思汗の挽歌の體裁を說き、其頭韻をふんで一節四句或は二句より成つて居る事は注意すべき事であると思ふといひ、次に日本語に譯し乍ら各節毎に說明を加へられた。

文學博士　喜田　貞吉君

奥羽二洲は概して其の開發甚だ後れ、德川時代に至る迄も北部地方には尙所々にアイヌ村が存在した程で、內地に於て史前時代又は太古上古の時代に行はれたこころが是等の地方では中古近世時代に實現せられたと云つてもよい場合が少くない。從つて現今此の地方にはアイヌ時代の遺物遺蹟は尙ほ其儘に殘存して居るものが少くなく、又他の史料からも其の沿革を徵すべき便宜が多いから、是等の地方開發史研究は、移して以て史料の乏しい我が史前時代又は太古の時代に於ける日本民族の成立、日本帝國の發展の蹟を明ならしむべきものである。然るに近時物質的文明は盛んに奥羽地方に移入せられるので折角遺された遺物遺蹟其他口碑傳說等の破壞される虞があるから、奥羽歷史の研究は今日最も急を要する事であると述べられた。

◎讀　史　會

例會　去る六月二十六日午後六時より學生集會場に於て開催、三浦西田天沼教授、喜田中村講師等二十四名參集左記講演あり、午後十時散會す。

宇佐神宮の起源と古代の鑛業　　肥後　和男君

宇佐八幡の金屬製練業者の祖神たるべしこの柳田國男氏の所說に對して古代の製練法を述べて、之を否定す。

醍醐三寶院の元興寺緣起に就いて

文學博士　喜田　貞吉君

本誌に揭載せられたるを以つて梗概を略す。

佛教美術に於て蓮華が盛んに用ゐらるゝ理由

源　豐　宗君

蓮華紋の印度に於て用ゐられしは、紀元前三世紀阿育王の建設したる石柱に初まるが、蓮華の記事を探るに、梨俱韋陀には尙殆んど見るところなく、梵書奥義書に至つて蓮華が宗教的意味を以て語らるゝを見る而してこは印度に於て發生せしといふよりも寧ろ外邦より傳來せりと思考せらるゝて轉じて埃及に於て古來蓮華を尊重した

りしことを藝術に神話にその實例を攷へて埃及起源說を高調し最後に西方彌陀の淨土極樂の思想も當時の最も優勢なる文化世界たる埃及を想起して成立せしものにあらざるかと結ばる。

◉支那學會

臨時大會 去る六月十三日午後一時より法學部大講堂に於て開催、敦煌遺書の寫眞關係圖書等を陳列し、曩に歐洲留學中彼地にて親しく遺書を繙閱されし狩野、羽田兩博士、並に今回特に此目的の爲に渡歐し豐富なる材料を將來せられし內藤博士の講演あり、各方面の參會者多く頗る盛會なりき。當日講演左の如し。

敦煌千佛洞と其遺書　文學博士　羽田亨君

敦煌の沿革、現今の地理等を略述し、敦煌遺書の發見されし次第より、之が密閉されし年代につき、スタイン氏は西紀一〇三六、此地が西夏に陷りし時の事とすれども、此遺書中ウィグル佛典の奧書に「至正十年虎の年六月四日ユチ・リユクチユク城の人クルト後學、サリク都統アスダイ皇子の令旨によりて書寫せり、善哉々々」なる文ある事を特に注意せらる。

敦煌の遺書に就て　文學博士　狩野直喜君

博士の渡歐されしは已に十餘年前にして、英佛にある遺書は未だ整理中なりしが、博士はペリオ氏の好意にて特に閱覽するを得し若干の珍書、論語、老子、孝經、妙法記、經典釋文等を解說され其學術上重要なることを、幾多の例を擧げて說明さる。猶敦煌に關連して、コズロフ氏がカラホト探險の結果獲たる遺書、莊子、劉知遠傳等をペトログラードにて觀られし話に及ぶ。

余が見たる敦煌遺書に就て　文學博士　內藤虎次郎君

博士が在歐中閱覽されし遺書の數、八百種に及び內百餘種を寫眞に撮られしが完成せる四十二種を本日陳列さる。其中珍しき切韻、文心彫龍、孝經鄭注、史記、虞世南帝王略論、唐律刑部格、監本老子、莊子釋本、劉子新論、本草、文選、舜子至孝變文、明妃曲(?)、征吐渾記(?)、李嶠雜詠等に就きて詳細なる解說を與へられたり

が漸くトートメス三世長ずるに及びて彼女の勢力失はるるに至れるを述べ最後に女王の墳墓の現狀を說きて結ぶ

◉西洋史讀書會

例會　去る六月十一日午後六時學生集會場にて第三回例會を開く。坂口教授、時野谷助教授等十八名出席。左の發表あり。

一八八八年以後の海上權に就て　竹村　越三君

主として英獨の海上權の抗爭に就てチルピツツ提督を補佐とするウイルヘルム二世の獨逸海軍擴張政策就中一九〇〇の擴張の結果二國標準主義放棄の止むなきに至れる英國が或は軍備縮少を提議し或は軍備擴張によりて獨逸に對抗せむとする經過を說明して大戰前に及ぶ。

ハツトセツプスト女王に就て　岡島誠太郎君

古代埃及第十八王朝のハツトセツプスト女王の系圖上の疑問を指摘し、稀世の女丈夫たる彼女の才幹政治的手腕を擧げトートメス二世を廢して自らアモン神の子として男裝をなし、男子の稱號を用ひたる事を象形文字の上より述べ南プントに商業的遠征を試み、その成功を紀念せんがため一大殿堂を建つる等獨りその權勢を壇にせし

會報

◉寄贈交換圖書

Catalogue of the Asiatic Library of Dr. F. E. Morrison part I. II.　東洋文庫

雞林類事麗言攷　同上

龍歌故語箋　同上

日本國民思想史（清原貞雄氏著）　寶文館

鄉土制度の研究（小野武夫氏著）　大岡山書店

經濟論叢　二〇の六・二一の・一二　經濟學會

龍谷大學論叢　二六一・二六三　龍谷大學論叢社

歷史地理　四六の一・三　日本學術普及會

史學雜誌　三六の六・七・八　史學會

史學　四の三　三田史學會

密宗學報　一四五・一四六　眞言宗京都大學而眞會

考古學雜誌　一五の八　考古學會

國學院雜誌　三一の八・九　國學院大學

人類學雜誌　四〇の九　東京人類學會

◉會員動靜

入會

東京市本鄉區眞砂町二五、朝陽館支店　太田稔氏
（右紹介者　平泉澄氏）

京都帝國大學文學部史學科學生　篠原智雄氏
（右紹介者會我部靜雄氏）

京都市西六條、龍谷大學　西光義遵氏
（右紹介者　西田直二郎氏）

大阪府三島郡石川村　藤波大超氏
（右紹介者　島田貞彥氏）

東京市本鄉區森川町一、蓋平館別宅　坂倉準二氏
（右紹介者　望月信成氏）

東京市市外下戶塚五五六、濱島方　京口元吉氏
（右紹介者　野々村威三氏）

岐阜縣海津中學校　伊藤信氏
（右紹介者　三浦周行氏）

長野縣諏訪郡豐平村　牛山秀樹氏
（右紹介者　天沼俊一氏）

東京市外代々幡幡ヶ谷本村北三六六　武田勝藏氏
（右紹介者　中村直勝氏）
東京府豐多摩郡高井戸村下高井戸二九一　富田啓温氏
東京府下、大崎町立正大學史學科　推名英尙氏
同　中込寛旭氏
同　水林文治氏
同　服部久雄氏
同　勝見文良氏
同　佐藤惠重氏
同　岡崎觀量氏
同　守屋龍之助氏
（右紹介者　入田整三氏）
佐賀高等學校圖書課
京都市上京區下鴨森本町　芝橋藤治郎方　小林秀武氏
（右紹介者島田貞彦氏）

■退　會　山崎藤吉氏